

〔原 著〕

幼児の他者感情の推測に関する研究 —感情推測の情報源選択に母親が及ぼす影響を中心に—

筑波大学心理学研究科：楯 誠

A study on preschooler's inference of other's emotion
— A focusing on the maternal influences when preschoolers select
information sources about inferring other's emotion —

Makoto Tate

問題と目的

子どもの感情概念の発達・他者感情推測についての研究は、発達心理学の重要なトピックの1つであり非常に多くの研究がなされている。例えば、表出される他者の表情の弁別・認知、ある特定の感情状態を引き起こす状況・出来事への理解、内的感情状態と外的感情表出が異なる感情偽装研究などその内容は多岐に渡る。その中の1つに他者の感情状態を推測する際に用いられる情報源の優位性についての研究が存在する。人が他者の感情を推測をするに当たって利用する情報は一つとは限らない。むしろ、様々な情報を用いることで、より正確な感情の推測が可能となると考えられる。もし得られる複数の情報から推測される他者感情が異なっている場合、子どもはどの情報源を優先し、どのような他者感情推測を行うのだろうか。

この矛盾した複数の情報源からの他者感情の推測についての発達の研究は幾つかなされている。これらの研究において主に使われる課題は矛盾エピソード課題であり、他者の感情状態に関する複数の情報（主に2つ）が矛盾している（例えばお誕生日なのに悲しい顔）エピソードの登場人物の感情状態の推測をするものである。矛盾エピソード課題を用いて主に行われている研究は、表情情報と状況情報の矛盾からの感情の推測である。これらの研究において多くは加齢とともに表情情報から状況情報に基づいた感

情推測を行う事が示唆されている（Gnepp, 1983; Hoffer & Badzinski, 1989; Kurdek & Rodgon, 1976; Reichenbach & Masters, 1983; 笹屋, 1997）。代表的な研究は Gnepp(1983)のものであり、彼女は喜び、悲しみ、恐れの3つの感情状態について、表情と状況がそれぞれに食い違う絵画刺激による矛盾エピソード課題を用いて幼児と小学生に実験を行ったところ、幼児で2割のみが状況情報を選択し、残りが表情情報から他者の感情を推測したのに対し、小学校6年次においてほぼ5割の子どもが状況情報に基づいた他者感情推測を行っていることを明らかにしており、他者感情推測において優先的に利用される情報源の発達の推移を明らかにしている。また、Hoffer & Badzinski(1989)も、3歳から12歳を対象に喜びと悲しみの2つの感情について矛盾エピソード課題による実験を行ったところ、Gnepp(1983)と同様に加齢と共に表情情報による感情推測が減少し、状況情報による感情推測が増加する事を明らかにしている。日本においては、笹屋（1997）がビデオ画像を用いた研究によって同様の結果を得ている。

矛盾エピソード課題を用いた感情推測、特に優先的に選択される情報源の発達の推移について焦点を当てた研究は、海外では多くなされているが、一方日本では笹屋（1997）が行っている以外ほとんど行われていない。そこで、本研究では矛盾エピソード課題による感情推測の情報源選択について特に幼児を対象に追試を行う

ことを目的の一つとする。

子どもの感情推測研究は、発達の推移だけでなく個人差についてもいくつかの研究がなされている。近年においては子どものを取り巻く周囲の環境、特に親の存在が与える影響について考察した研究が幾つか存在する。例を挙げるなら Dunn, Brown & Beardsall(1991)は、縦断的研究から、感情について多くを語る家庭（ここでは母親ときょうだい）の中で育った子どもは、そうでない子どもに比べて感情推測が優れている事を明らかにしている。また Denham, Zoller & Couchoud(1994)は、幼児の感情推測・理解について縦断的研究を行い親の決定的な役割について指摘している。Denham ら(1994)は、子どもは表情や感情を引き起こす状況について親から多くのことを学ぶとし、躰や日々の会話に含まれる感情についての話題や、子どもの感情についての親の反応が後の子どもの感情推測・理解に影響を与えると主張した。以上のように、子どもの感情推測における養育者の感情の言語的表現能力の重要性が指摘されているが、しかしながら養育者、特に母親の感情の言語的表現能力が子どもの矛盾エピソード課題による感情推測の情報源選択にどのような影響をもたらすのかについて記述した研究はほとんどない。そこで本研究では矛盾エピソード課題において幼児の感情推測の為の情報源選択に、母親の感情の言語的表現能力がどのような影響をもたらすのかについて明らかにすることを目的とする。

また、子どもの感情推測に影響を与える要因として母親の性格特性が研究されている。例えば、Zahn-Waxler, Kochanska & Krupnick(1990)は、抑うつ的な母親に育てられた子どもとそうでない子どもについて、怒って家から出ようとする母親と台所にいる子どもの絵を提示し、絵の中の子供の気持ちと母親が怒っている理由を尋ねた。その結果、抑うつ的な母親を持つ子どもはそうでない子どもに比べて、絵の中の子どもの気持ちに自責や謝罪といった罪悪感や責任について言及する答えは少なく、また母親の怒っている理由も非現実的で破壊的、暴力的であるという事が明らかになった。そこで、

本研究においては母親の性格特性、とくに楽観性・悲観性が矛盾エピソード課題において幼児の感情推測のための情報源選択にどのような影響をもたらすのかについて併せて検討する。

方 法

被験者

茨城県内の幼稚園に通園する5歳児46名（4歳6ヶ月～5歳6ヶ月：平均5歳0ヶ月）、6歳児26名（5歳7ヶ月～6歳6ヶ月：平均6歳2ヶ月）及びその母親63名。

課題

(1) 幼児への課題 エピソードの登場人物の表情と登場人物を取り巻く状況が矛盾する矛盾エピソード課題を8種類作成した。課題の作成にあたっては、Gnepp(1983)及び渡辺・瀧口(1986)の課題を参考にした。エピソード場面はいずれも四つ切りの画用紙に描かれ、黒の線描画に彩色を施したもので表現された。8種類の課題は大きく2種類に分けられ、一般にポジティブな感情を引き起こす状況とネガティブな表情を示しているものを4種類（ポジティブ条件）、一般的にネガティブな感情を引き起こす状況とポジティブな表情を示している登場人物が描かれたものを4種類（ネガティブ条件）作成した。刺激絵画は被験児の性別に対応させ、男の子（太郎君）が主人公のもの、女の子（花子ちゃん）が主人公のもの計16種類作成した。また、絵画の中の状況を説明するストーリーを同数作成した。ストーリーはTable 1に示した。

(2) 母親への調査用紙 母親の感情の言語的表現能力を測定する為、ある絵画を基に子どもへ聞かせるようなストーリーを自由記述で作成させる、ストーリー作成課題2題と性格特性を明らかにする為の尺度調査の2部構成からなる調査用紙を作成した。ストーリー作成課題に使用した絵画刺激は、Bellak & Bellak(1974)の幼児・児童版絵画統覚検査（Children's Apperception Test, CAT）の中から多様な感情が見い出せ、かつ親子の姿が描かれているno.1（ニワトリとヒヨコ）及びno.4（カンガルーの親子）

Table 1 各条件におけるストーリー内容

ポジティブ条件（主人公はネガティブな表情，状況は一般的にポジティブな場面）	
誕生日	今日は太郎君（花子ちゃん）のお誕生日です。お父さんは大きなプレゼントを買ってきてくれてお母さんはケーキやご馳走を作って，お祝いをしてくれます。太郎君（花子ちゃん）は今どんな気持ちですか。
アイス	太郎君（花子ちゃん）とお母さんは待ちに買い物に出ています。買い物が終わって，お母さんは太郎君にアイスクリームを買ってくれました。太郎君（花子ちゃん）は今どんな気持ちですか。
絵本	お友達の花子ちゃん（優子ちゃん）が家から持ってきた絵本を太郎君（花子ちゃん）に貸してくれました。太郎君（花子ちゃん）は今どんな気持ちですか。
運動会	今日は幼稚園の運動会です。太郎君（花子ちゃん）はかけっこに出て，1等賞を取りました。太郎君（花子ちゃん）は今どんな気持ちですか。
ネガティブ条件（主人公はポジティブな表情，状況は一般的にネガティブな場面）	
自転車	太郎君（花子ちゃん）は自転車に乗っていて転んでしまいました。太郎君（花子ちゃん）は怪我をしませんでしたが，自転車はでこぼこに壊れてしまいました。太郎君（花子ちゃん）は今どんな気持ちですか。
遠足	今日は幼稚園の遠足の日です。ところが台風で大雨が降ってしまい，遠足は中止になってしまいました。太郎君（花子ちゃん）は今どんな気持ちですか。
病気	太郎君（花子ちゃん）は昨日砂場で遊ぶおもちゃを買ってもらいました。ところが太郎君（花子ちゃん）は風邪を引いてしまいおもちゃを使ってお外で遊ぶことができません。太郎君（花子ちゃん）は今どんな気持ちですか。
小鳥	太郎君（花子ちゃん）のお家では小鳥さんを飼っていて，太郎君（花子ちゃん）が餌をあげたり水をあげたりと世話をしています。ある日太郎君（花子ちゃん）が幼稚園から帰ってくると，小鳥さんは死んでいました。太郎君（花子ちゃん）は今どんな気持ちですか。

*括弧内は，女子へのストーリーを示す。

の図版を使用した。一方，尺度については南（1996）のオプティミズム尺度を使用した。

手続き

幼児への面接は，個別に行われた。矛盾エピソード課題は1人の被験者に対して8種類全て行い，ランダムに提示された。提示される課題の主人公は全て被験者の性別と一致させた。実

験者は，これから行う課題についての説明を行った後に実験を開始した。絵画刺激を被験児に提示し，ストーリーを教示した後に『太郎君（花子ちゃん）は，今どんな気持ちだと思う。』と登場人物の感情について質問し，口頭での回答をさせた。回答できなかった被験者に対しては再度ストーリーを教示し，絵画刺激の説明を

結 果

行った後に質問を繰り返した。それでも答えられない被験児に対しては『太郎君（花子ちゃん）は、今嬉しい気持ちかな、それとも悲しい気持ちかな』と具体的な選択肢を示して回答を促した。明確に判断しにくい感情表現に対しては『その気持ちは、どちらかという嬉しい気持ちかな、それとも悲しい気持ちかな』と具体的な選択肢を示して感情の志向性（ポジティブかネガティブか）の明確化を行った。母親への調査用紙は幼稚園側を通して配布し回収した。

コーディング

(1) 幼児の反応のコーディング 被験者の回答は、大きくポジティブな感情（嬉しい・楽しい等）とネガティブな感情（悲しい・寂しい等）の2種類に分け、それぞれの条件においてこの感情を引き起こすと考えられる情報源をカウントした（ポジティブ条件4種類においては、ポジティブな感情を回答した場合は状況情報に、ネガティブな感情を回答した場合は表情情報にカウントした。逆にネガティブ条件4種類においては、ポジティブな感情を回答した場合は表情情報に、ネガティブな感情を回答した場合は状況情報にカウントした）。

(2) 母親の反応のコーディング 母親のストーリー作成課題については、感情の言語的表現能力をストーリー内に含まれる感情語の量として定義し、作成されたストーリー内容から感情語を抽出し、カウントした。ここでの感情語とは、「嬉しい」「楽しい」「悲しい」「心配である」「怒る」といった、それ自体が感情状態を示す語句と定義した。これには、語尾の「～かな」「～だね」という表現や、「あっ」「わあっ」といった感嘆詞は含めなかった。また、「幸せ」「うきうき」といったより抽象度の高い表現や擬音的表現、「笑う」「泣く」といった行動表現も感情語とは見なさなかった。以上のコーディングを2名で行ったところ、一致率が85.4%であった。不一致のものについては、協議を行い決定した。また、質問紙の回答は「まったくそう思わない」～「まったくそう思う」までの選択肢を1点～6点に得点化して平均得点を求めた。逆転項目については得点内容を逆転して得点化を行った。

得られた回答は、表情情報を基準にした感情推測と状況情報を基準にした感情推測に分類し、8つのエピソードにおいてどちらの情報も元に感情推測をしたかによって、被験者を表情情報優勢型（表情情報からの感情推測が状況情報からの感情推測より多い）、状況情報優勢型（状況情報からの感情推測が表情情報からの感情推測より多い）、中間型（表情情報からの感情推測と状況情報からの感情推測が同数）の3つに分類した。8つのエピソード全てに回答できない者は以下の分析から除外した。

全体的特徴

8つのエピソード全てに回答出来なかった者7名を除外し、幼児65名が分析対象となった。分析対象の幼児の年齢差及び性差についてFisherの直接確率検定を行ったところ、いずれにおいても有意差は見られなかった。そのため、以下の結果は年齢・性別を統合して分析を行った。矛盾エピソード課題全体における感情推測の情報源について1×3のカイ二乗検定を行ったところ、有意差が見られた（ $\chi^2=17.2$, $df=2$, $p<.01$, Table 2）。ライアンの名義水準を用いた多重比較の結果、表情情報優勢型と状況情報優勢型の被験者の間には差がなく、双方とも中間型の被験者よりも多いということが明らかになった。また、矛盾エピソード課題のうち、ポジティブ条件について感情推測の情報源について1×3のカイ二乗検定を行ったところ、有意差が見られた（ $\chi^2=17.75$, $df=2$, $p<.01$ ）。ライアンの名義水準を用いた多重比較の結果、表情優勢型の被験者が中間型や状況有意型の被験者より有意に多いことが明らかになり、ポジティブ条件においては表情を情報源にして感情推測をする幼児が多いことが示唆された。一方、ネガティブ条件における感情推測の情報源につ

Table 2 幼児の他者感情推測における情報源選択の全体的傾向

表情情報優勢型 (表情>状況)	中間型 (表情=状況)	状況情報優勢型 (表情<状況)
31	6	28

いて1×3のカイ二乗検定を行ったところ、有意差が見られた ($\chi^2=20.33$, $df=2$, $p<.01$)。ライアンの名義水準を用いた多重比較の結果、状況優勢型の被験者が中間型や表情優勢型の被験者より多いことが明らかになり、ネガティブ条件においては状況を情報源に感情推測を行う幼児が多いことが示唆された (Table 3)。

母親の感情の言語的表現能力と幼児の感情推測の情報源選択の関係性

母親の質問紙回答と幼児の面接回答を対応させて分析したところ、母子48組が分析対象になった。感情語数そのものが非常に少なかった為 (平均0.83)、母親のストーリー作成課題から、感情語を含むストーリーを作成した母親を持つ幼児 (感情語内包群) と持たない幼児 (感情語非内包群) に分類して分析を行った。分類の結果、感情語内包群28名、感情語非内包群が20名であった。幼児の感情推測の情報選択のタイプと感情語内包群・非内包群について3×2のFisherの直接確率検定を行ったところ、有意差は見られなかった。また、矛盾エピソード課題のうち、ポジティブ条件及びネガティブ条件についてそれぞれ3×2のFisherの直接確率検定を行ったところ、いずれの条件においても有意差は見られなかった。

母親の楽観性・悲観性と幼児の感情推測の情報源選択の関係性

母親の質問紙回答と、幼児の面接回答を対応させて分析したところ、母子43組が分析対象になった。母親の記述したオプティミズム尺度からの平均得点をもとに、幼児を22名の母親楽観得点高群と21名の母親楽観得点低群の2群に分類し分析を行った。幼児の感情推測の情報選択のタイプと母親楽観得点群について3×2のFisherの直接確率検定を行ったところ、有意差

は見られなかった。また、矛盾エピソード課題のうち、ポジティブ条件及びネガティブ条件についてそれぞれ3×2のFisherの直接確率検定を行ったところ、いずれの条件においても有意差は見られなかった。

考 察

矛盾エピソード課題全体としては、幼児の感情推測における情報源選択には大きな偏りは見られなかった。これは、幼児期においては表情情報からの手がかりを優勢とする先行研究の結果とは一致しなかった。この原因として考えられるのは、一つは課題刺激に登場人物の表情と状況を描いた絵画刺激に加えて、状況を説明するストーリー刺激を加えたためと考えられる。Gnepp(1983)の研究において、エピソードが描かれた絵画刺激のみの条件と状況の説明を加えた条件では、明らかに後者の方がより状況情報に基づいた感情推測を行った事を報告しており、この効果が本研究ではより強く現れた可能性が考えられる。また、絵画刺激で提示された登場人物の表情の曖昧さが考えられる。本研究の登場人物の表情は、明確な笑顔あるいは泣き顔というようにはっきりとした感情表出をしていなかった。そのため、表情情報の効果が低く出てしまい、先行研究に見られる表情情報の優位性が見られなくなった可能性が考えられる。

また、ポジティブ条件とネガティブ条件における情報源選択は、ポジティブ条件ではより表情情報をネガティブ条件ではより状況情報を元にした感情推測を行う事が明らかになった。ネガティブ条件における状況情報の優位性は、子どものディスプレイールの理解と関連性があると考えられる。幼児を含め人は社会的に許容

Table 3 ポジティブ条件・ネガティブ条件における幼児の他者感情推測における情報源選択の傾向

	表情情報優勢型 (表情>状況)	中間型 (表情=状況)	状況情報優勢型 (表情<状況)
ポジティブ条件	37	10	18
ネガティブ条件	18	9	38

されにくいネガティブな感情を抑制し、ポジティブな感情を表出する事を求められる機会が多いと考えられる。幼児は既にネガティブな感情を引き起こす状況下でのポジティブな表出はディスプレイルールに従った偽装の要素が強い事を経験的に理解している為、ネガティブ条件での状況情報の優位性が生じた可能性が考えられる。また、ポジティブ条件での表情情報の優位性は、エピソード内の情報の矛盾が「好み」といった個人の特性によってより説明する事が可能である為、幼児の持つ表情情報の優位性がネガティブ条件よりも強く生じた結果と考えられる。しかしながら、この条件間における差異は、今回課題として使用している文脈に大きな影響を受けていると考えられるため、文脈の等質性を考慮した更なる研究が必要と考えられる。

本研究においては、母親の感情の言語的表現能力と幼児の他者感情推測における情報源選択の関係性について検討を行ったが、Dunnら(1991)やDenhamら(1994)に見られるような影響は見られなかった。これは、母親の感情の言語的表現能力は、矛盾エピソード課題における情報源選択になんら影響を及ぼさないと考える事も可能であるが、それ以上に本研究で用いたストーリー作成課題では、母親の感情の言語的表現能力を適切に測ることが出来なかった可能性が考えられる。Dunnら(1991)やDenhamら(1994)の研究では、母親を始めとする養育者あるいは家族の感情の言語的表現能力は、実際の会話の分析の中から抽出し測定されており、本研究で用いられた記述という手段は取られていない。そのため、会話での言語的表現能力と記述での言語的表現能力は必ずしも一致せず、本研究では先行研究において見られたような影響が見られなかった可能性が考えられる。また、先行研究においては、養育者あるいは家族の一方的な働きかけだけでなく、幼児の側からのコミュニケーションも会話の中で含まれている。本研究では、母親から幼児への一方的な働きかけのみを測定しており、そのためこのような結果が生じたとも考えられる。

本研究においては、母親の性格特性（楽観

性・悲観性）と幼児の他者感情推測における情報源選択には何の関連性も見られなかった。これは、抑うつ的な母親を対象としたZahn-Waxlerら(1990)らの研究に比べて、本研究は楽観性・悲観性と比較的マイルドな性格特性との関連性を検討したため、幼児の感情推測に大きな影響をもたらすような要因ではなかった可能性が考えられる。また、質問紙が性格に母親の楽観性・悲観性を測定しきれなかった可能性が考えられる。本研究においては、母親の調査用紙のデータと幼児の面接調査データの一致をあらかじめ母親側に伝えていたため、「自分のものの見方が子どもに何らかの悪影響を与えているのではないか?」というような不安を煽ってしまった可能性が考えられる。その結果質問紙への正確な回答が阻害され、母親の性格特性の影響が見られなくなってしまったのかもしれない。

本研究においては、幼児の感情推測における情報源選択に母親が与える影響について、明確な結果を得ることが出来なかった。幼児の感情推測に関してより明確な母親の影響を測定するためには、Dunnら(1991)やDenhamら(1994)が行ったようなより直接的なアプローチを取る必要があると考えられる。また、母親からの影響だけ出なく、母親と幼児の相互作用から生じる影響についても明らかにする事が、今後の課題であると思われる。

引用文献

- Bellak, L. & Bellak, S. S. 1974 *Children's apperception test (C. A. T)*. 6th ed. Larchmont, N.Y.: C. P. S. inc.
- Denham, S. A., Zoller, D. & Couchould, E. A. 1994 Socialization of preschooler's emotion understanding. *Developmental Psychology*, **30**, 928-936.
- Dunn, J., Brown, J., & Beardsall, L. 1991 Family talk about feeling states and children's later understanding of other's emotions. *Developmental Psychology*, **27**, 448-455.

- Gnepp, J. 1983 Children's social sensitivity: Inferring emotions from conflicting cues. *Developmental Psychology*, **19**, 805-814.
- Hoffer, C. & Badzinski, D. M. 1989 Children's integration of facial and situational cues to emotion. *Child Development*, **60**, 411-422.
- Kurdek, L. A., & Rodgon, M. M. 1975 Perceptual, cognitive, and affective perspective taking in kindergarten through sixth-grade children. *Developmental Psychology*, **11**, 643-650.
- 南俊也 1996 オプティミズムがストレスサー評価並びに主観的幸福感に及ぼす影響. 筑波大学心理学研究科修士論文 (未公刊).
- Reichenbach, L. & Masters, J. C. 1983 Children's use of expressive and contextual cues in judgments of emotion. *Child Development*, **54**, 993-1004.
- 笹屋里絵 1997 表情及び状況手掛りからの他者感情推測 教育心理学研究, **45**, 312-319
- 渡辺弥生・瀧口ちひろ 1986 幼児の共感と母親の共感との関係 教育心理学研究, **34**, 324-331.
- Zahn-Waxler, C., Kochanska, G., & Krupnick, J. 1990 Patterns of guilt in children of depressed and well mothers. *Developmental Psychology*, **26**, 51-59.